

総 括

ナカガワ シゲミ
中川 成美

第39回国際日本文学研究集会を終えるにあたって、総括に替えてささやかな感想を述べたい。今年度は万葉集、古事記から村上春樹、堀江敏幸まで、年代的にも内容的にも幅広い視野からの発表があった。日本文学という磁場にたぐり寄せられたこれらの成果について、今後どのように発展していくかが大変に楽しみな研究集会となった。

今回の発表について時代順にみていきたい。松原舞氏は、万葉集の「青」という文字表記をめぐる問題を取り上げ、レトリックにまでおよぶ非常に大きな問題提起をした。またアンダソヴァ・マラル氏は、古事記におけるシャーマニズムと創造力の問題に触れて発表した。どちらも一つの具体的な古典テキストをもとにしながら、そこに内在する意識や表記、文体や文学的表象の問題を扱われていたのが印象に残る。

平安文学においては、須藤圭氏は「女にて見る」という訳語を通して、同時代におけるジェンダー意識のみならず、翻訳ということの意味、そして受容者のジェンダー意識のあり方について言及した。また、邱春泉氏は『とはずがたり』において、二条の自己投影というものを手がかりにしながら、作品を書くという行為の認知の在り方を問うた。中世・近世文学では、李相旻氏が『草庵集』の成立過程を周密に踏査して、その構成を分析、川内有子氏は欧米における『忠臣蔵』の受容という問題を通して、物語の生成とその拡散、およびそれをどう解釈していくかについて言及した。

近代文学の分野では、劉銀炅氏が高浜虚子の朝鮮半島の旅行を素材に、そこに描かれ、見逃された日本人の意識を考察した。崔惠秀氏は中里介山の膨大な『大菩薩峠』というテキストについて、綿密な実証研究の作業を通じて、その改稿過程から、作者の意識の問題、それが及ぼした読者、文体にわたる文学的課題についてアプローチした。また、バーバラ・ハートリー氏は、武田泰淳の『快樂』をもとに、父親像を通して、泰淳作品におけるジェンダーの配置、ジェンダー認知の問題に言及した。

二つの村上春樹に関する発表では、ダルミ・カタリン氏が、『海辺のカフカ』におけるマジック・リアリズムの応用という問題を追及し、王静氏は村上春樹の海外紀行を対象に、ヨーロッパでの「巡礼」とも呼ぶべき旅行におけるスピリチュアルな側面を考察した。世界的な広がりの中で、春樹文学を解読しようという試みは日本だけに留まらない多様な文学的課題を呼び起こした。そして、グアリーニ・レティツィア氏は堀江敏幸の『なずな』から「イクメン」という新しい父親像を抽出して、日本の家族観の変遷、あるいは育児観、ジェンダー認識の違いについて分析した。

ポスターセッションにおいては、6つのセッションが設けられ、『源氏物語』、『宇津保物語』、『徒然草』、夏目漱石、川端康成、太宰治が取り上げられて充実したセッションとなった。

最後の国際シンポジウム「日本文学の越境——非・日本語でHaikuを読む／詠む——」は、世界的規模の文学ジャンルとして多くの実作者、研究者を持つ「俳句／HAIKU」という領域を扱って非常に大きな成果を得た。木村聡雄氏は国際交流としての俳句を概括し、マイケル・フェスラー氏はエズラ・パウンド研究、また実作者としての立場からその文学的意義についてを、リー・ガーガ氏は元アメリカ俳句協会会長として英語圏における実作の状況を報告、鳥羽田重直氏は台湾の俳句状況について報告した。本研究集会としては初めて英語による2本の発表を入れたが、逐次通訳もうまくいき、今後外国語による発表についても考えていく方向が示唆された。

来年はいよいよ40周年を迎えるが、今回が世界の日本文学研究の状況と連携・交流して、より深化した研究へと向かうことが期待される良い会となった。関係者の甚大な尽力に謝意を表したい。日本文学という共有のテキストを世界でわかちあうことによって現出するこの空間を大切にしたいと切に願う。